

Newsletter

March 2010

<http://www.aack.or.jp>

目次

追悼 名誉会員四手井綱英氏 アンギラス、高潔なる野人 岩坪五郎……………1	森林生態学研究室をつくった 四手井綱英先生を偲んで 荻野和彦……………3	追悼 日高敏隆氏 日高敏隆先生を偲んで 幸島司郎……………4	OKYAN 2009 の報告 (兵庫県西播磨 長水山・大甲山の山行記録) 潮崎安弘……………6	山案内人の竹沢長衛とAACK 齋藤清明……………7	ポーランドの旅のご案内 酒井敏明、岩坪五郎……………9	映画「カラコルム」、「花嫁の峰チヨゴリザ」 DVDブック刊行のお知らせ……………9	研究フォーラム ヒマラヤ研究と川喜田二郎……………10	図書紹介 シエルバから見たヒマラヤ登山 安仁屋政武……………11	ジョン・モリスの戦中ニッポン滞在記 平井一正……………13	日本山岳協会・山岳共済の案内 事務局 吹田啓一郎……………14	会員動向 ……………16	訂正 ……………16	編集後記 ……………16
----------------------------------------------------	--------------------------------------------	---------------------------------------------	--------------------------------------------------------------	-------------------------------------	---------------------------------------	----------------------------------------------	---------------------------------------	-----------------------------------------------	----------------------------------	-------------------------------------------	------------------------	----------------------	------------------------

追悼 名誉会員四手井綱英氏 アンギラス、高潔なる野人

岩坪五郎

四手井綱英先生は、私にとつて研究の指導教官であり、二代先任の教授であり、また京都大学学士山岳会の先輩である。

一九三七年京都帝国大学農学部林学科を卒業、山林局に就職。二度の中国への応召、従軍の後、一九五四年林野庁林業試験場から京都大学農学部林学教室造林学研究室担当教授として赴任した。先生は森林生態学の立場から我が国森林の定量的な研究調査を開始し、北大の館脇操さん、東大の佐藤大七郎さん、大阪市大の吉良竜夫さん（AACK会員）ら多くの研究者を糾合して、北海道から沖縄に至る森林の現存量、成長量、密度効果（混みぐあいと木の大きさ）に関する研究など生産生態学に関する研究、森林生態系の物質循環（炭素、窒素、リンなど）の 대기、土壌、樹木をめぐる動き）の研究などを実施した。

この研究チームは、一九六〇年代に実施された国際生物事業計画（IBP）において、実績においても方

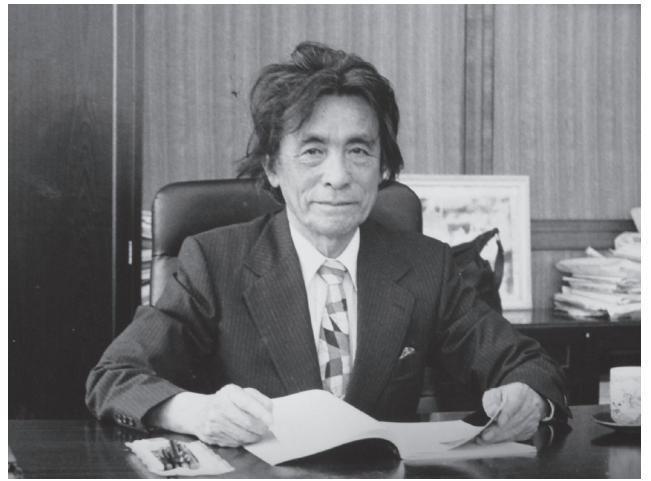
法論においても当時の世界をリードするものであった。

わたしは、森林に入ってくる降水と流出水に含まれる養分物質の量的比較から森林での水に伴う物質循環の研究課題を与えられ、定年退官までこの課題をつづけることになった。

当初、そのレヴェルは欧州を抜いていた。しかし、後進の米国の大規模な研究体制に追い抜かれた。わたしが自転車で試験地での採水をし、一人で分析し、手回し計算機でデータ処理をしていた時、彼らはジープで採水、分析は専門技術者たち、データ処理は大型計算機を使った。「零戦」と「グラマン」の戦いであった。それは一九六九年の大学闘争における研究中断で、ミッドウェイ海戦の結果をもたらした。

先生は木材生産に専念し、全国に画一的な伐採・造林作業を実行する林野庁に、そのやり方では日本の森林を破壊してしまう、と苦言を呈し続けた。当時、林野庁の面接試験で、尊敬する人物は、との問いに、四手井綱英の名をあげる受験生が多く、林野庁側を困惑せしめたという。

またブナ林、鎮守の森、里山など日本の昔からの自然の保護管理に熱心であった。とくに農地と農家の周辺にある森林を里山と呼び、それは農家に薪を提供し、その灰分は農地



京都府立大学学長時代

の肥料となり、その行為の繰り返しを継続のために遷移がとどめられ、マツタケやシイタケを生産する二次林のマツ林、コナラ林として存続する、と生態学的な位置づけをおこなった。この活動に対して「南方熊楠賞」が贈られている。

体制・秩序を重んじる大学における歯に衣着せぬ自由な見解の表明は、学部長や総長らにその風貌とともに野人と恐れられる一方、男女学生には、原始怪獣アンギラスと敬愛された。

農学部代表として全学の委員会に出席した時、次兄の綱彦先生と親しかった平沢興総長は、四手井君、その服装はなんとかならんか、といったという。ダークスーツにネクタ

イであるべきなのに、よれよれズボンにカッターシャツ、奥さんが使い古したセーター姿に対する苦情であった。これに対し、「京大教授には制服があるのでですか」と応えて、辟易させた。また、女子学生や女子職員によくもてた。吉良竜夫さんと同時期、奈良女子大学で講義をしていたが、四手井さんのほうが評判が高いと奈良女にいた近藤公夫さんが報告し、吉良さんはどうしてだろう、と合点がいかにうであった。一九六九年大学闘争の時期、京大でおこなわれた日本林学会大会の実行委員長であった先生に、われわれ造反教官は林学研究についての討論を申し入れた。それに対する委員長の見解、回答はそれほど明快なものとは思われなかったけれど、出席会員から圧倒的な大拍手でもって迎えられ、われわれはさすがと退場せざるをえなかった。今西錦司さんは、登山・探検のリーダーの資質の第一に「人望」をあげているけれど、先生の人気には脱帽すべきものがあった。

晩年の出版物、『森林はモリやハヤシではない―私の森林論―』二〇〇六年、『四手井綱英が語る、これからの日本の森林づくり』二〇〇九年（ともにナカニシヤ出版刊）において、自分たちが日本の森林をダメにしていた。若い人たちにその再生の努力をお願いすると、自己批判的である。具合のよくないことの責任は他人に押し付ける人が多い中で、真に高潔な人格といえよう。

京都大学学士山岳会の先輩としての四手井さんについて、すこし述べる。

四手井さんは、京都一中山岳部、三高山岳

部、京大旅行部とAACKのエリートコースの人である。しかし、次兄の綱彦さんと今西錦司さん、西堀栄三郎さん、桑原武夫さんらは同じ昭三組（一九二八年卒業）である。やりにくかったに違いない。三高のときの鹿島槍での遭難、同時期におこった御岳での遭難の捜索についての話以外、ご本人から登山についての話を聞いた覚えがない。

京大教授として帰京してからも、チョゴリザは桑原さん、ノシヤックは酒戸弥二郎さん、サルトロ・カンリは四手井綱彦さん、と先輩が並び、サポート役ばかりで出番が来ない。一九七二年、多田政忠さんの定年にもなつて、ついにAACK会長への就任を要請された。木原均、桑原、今西、多田の諸先輩に続く六代目の会長である。しかし、七三年のヤルンカンには西堀さんが隊長として出馬した。そして七四年、岩坪が隊長をつとめた山岳部のK12峰登山隊の遭難事故で、会長を引責辞職した。わたしの失敗が辞職をよぎなくしたのである。申し訳ないことであった。

京都大学を定年退官の後、(財)日本モンキーセンター所長に、次いで一九八〇年、京都府立大学長に就任した。一九八四年、ついに遠征登山のお鉢が回ってきた。

チベットの西南部、カイラスの南にあるナムナニ（グルラマンダータ七六九四m）はかねがねAACKが理想としていた憧れの未踏峰である。わたしたちは、京都を訪問してきた中国の胡耀邦総書記に、林田悠紀夫京都府知事を通じて、中国登山協会、同志社山岳会、

いたのだという。

だから自分がやったのはいわば名乗り、呼び名を替えたに過ぎないのだともなげにおっしゃったのだ。えっと驚いたわたしに「そやけどな、名乗りはいわば自称や。呼び名は他人に呼んでもらわにゃならん、他人に呼ばせるためにはほんものでないといかん」一九六〇年代のはじめころのことであった。

そのころ、京大に東南アジア研究を興そうと学部横断的な動きがあった。自然科学と社会科学の要として重要な役割を担っておられた先生のご指導をうけて、タイの森林研究を志していたわたしに先生は時々、大学における研究の、運営の機微に触れることをもらされることがあった。望外の喜びであった。このような破格のご指導をいただいて、通常の師弟関係のなかでは到底得られないような大きなものを授けられたように感じることも少なくなかった。

先生を豪放磊落、闊達な野人と評する人たちが少なくない。しかし、先生のように大学の講座編成を官制と「名乗り」と見わけることのできる人は大学人のなかには決して多くはない。先生は組織をきめ細かく見ることができる極めて緻密で、注意深い人だったのだ。

そのことは「名乗り」と「呼び名」を区別してお考えであったということにもはつきり現れている。「名乗り」は自分の覚悟である。それを他人が認めたときに自他共に認める組織として通用するのだとお考えのようであった。

「研究室の名乗りを替えただけ」のことが

学内外におおきな反響をよんだ。もちろん賛成する声も多かった。特に学生たちの人気が高かった。支援の手を差し伸べてくださる方もあった。そのおかげで全国を股に駆けた野外調査を長年に亘って続けることができた。が、批判的な声も少なくはなかった。

名乗りと呼び名を一致させるために先生の働きはすさまじかった。研究室の研究テーマは学生や大学院生がそれぞれに実験、野外調査など思いおもいにもっていくのだけれど、たいていの場合かなり自由に「やってみろ」だったように思う。勝手気ままに選んだテーマのように見えていて、結果が大きな体系のなかに整頓されて、それぞれの居場所が先生によって与えられていくように感じられた。どのテーマも必要でないものはなかったし、余計なものもなかった。このようにして森林の一次生産力の調査が生態系の物質循環に発展していった。地球規模の炭素循環を議論していたのは一九七〇年代のことだった。四手井生態学はいろいろな研究成果を取り込ん

追悼 日高敏隆氏

日高敏隆先生を偲んで

幸島司郎

日高先生と最初にお会いしたのは一九七六年、私が京大理学部の新入生の時ですから、もう三〇年以上も前のことになります。日高

で、自己発展的に大きな体系のものになっていった。四手井研究室は名実ともに森林生態学研究室として自他共に許す研究室として完成したのであった。

ずっと後になって、自分が愛媛大学林学科に赴任することになった。赴任先の周囲では森林生態学研究室から来るのだから、造林学は担任させられないのではないかと危惧の念を抱いたものがあつたという。しかし、間伐も伐木も自分でやれるということ、四手井生態学は生態学のための生態学ではないと妙なところで感心されたり、安心されたりしたものである。四手井先生の故智に倣って、研究室の看板を「森林生態学・造林学」にする」と表明すると大いに歓迎するといわれた。しかし、同時になぜ造林学を残すのかとも問われた。「林学は森林生態学を基礎にする」という四手井生態学の原点を忘れないために必要だと応えることにしていた。

先生の広く、深い学恩に心から感謝しながら、ご冥福をお祈りしたい。

先生は、その前の年に東京農工大学から京大理学部の動物学教室に移ってこられたばかりでした。

そのころ、私は一人前に進路に悩んでいました。そもそも、アフリカでゴリラやチンパンジーの研究がしたくて京大に入ったのですが、「フィールドワークには山登りの技術が必要だろう」と思って山岳部に入ったのが運のつき。気がつくと、例によって山ばかり

登って勉強しないアホな学生になっていました。とても大学院に進学できるとは思えませんが、それに進学できたとしても、優秀な霊長類学者が既にたくさんいる中で、自分が何か新しいことができると思えませんでした。でも卒業前に、どうしても何かおもしろい研究がしてみたいと考え、こんなヤクザな学生でも相手にしてくれそうな先生を探していたのです。そんな時、現れたのが日高先生でした。

先生が担当していた「比較生理学」の講義があまりに面白かったのと、あの飄々とした人柄にひかれ、課題研究(卒業研究)をするなら、この先生のところしかないと思ひ、研究室に押しかけました。講義の内容は、先生が子供の頃から不思議に思っている研究を続けてこられた「蝶道」の話(昨年放映されたNHKBS hi「渋谷でチョウを追って」動物行動学者 日高敏隆の夢」に詳しい)や、学位論文となったチョウの蛹の色彩の研究、ガのフェロモンに関する従来の常識をくつが



1992年 北極のスビツバルゲン島にて

えしたアメリカシロヒトリの研究、チョウがひらひら飛び、ガが直線的に飛ぶのはなぜかなど、今でも一つ一つ思い出せるほど面白いものでした。しかし話の内容の面白さもさることながら、自分の研究の話を本当に楽しんで話しておられる姿が大変印象的だったのです。

日高先生は、突然押しかけてきた私の相談にも気さくに応じてくださり、「課題研究では、何でも好きなことを研究していいよ。そんなに山が好きなら山でできる研究をすればいい。山に登れることも能力の一つだからね。そのうちヒマラヤに行けるかもしれないよ。」と、私には願ってもないアドバイスをしてくれました。また、何を研究すれば良いかわからないという私に「山に登って、何か一つ『不思議なこと』を見つけてきなさい。それを研究すればいい。」と、課題を与えてくれたのです。こうして始まったのが、私の「雪虫」の研究です。真冬の雪山の雪の上を、なぜ昆虫が歩いているのか? 寒くないのか? 何を食べてるのか? 雪の上で何をしているのか? 不思議でたまらず、雪山にテントを張って研究を続けました。

大学院入試に二度失敗したため、卒業研究に三年以上かけることになりましたが、幸い、この「雪虫」の研究は、その後、ヒマラヤやパタゴニアでの氷河に生息する昆虫の発見や氷河生態系の研究に発展したので、大学院では「ヒマラヤで研究する」という夢もかなえることができました。おかげさまで今も、世界各地で氷河や動物の研究を続けています。

卒業後は長らく職がなく苦しい時期もありましたが、そんな時にも、フィールドから帰って研究の話をするたびに「面白いなー、なんでだろーねー?」と、いつも一緒に不思議がってくれた日高先生の存在が大きな心の支えでした。ほんとうに感謝しています。

日高先生には、翻訳や著作を通じて、日本にいち早く「動物行動学」や「進化生態学」という生物学の分野を紹介し、日本動物行動学会の初代会長として動物行動学を日本に根付かせた功績や、初代学長として滋賀県立大学の、また初代所長として総合地球環境学研究所の設立や運営に貢献された功績のほか、わかりやすく楽しいエッセイの書き手として、多くの人々に愛されてきたことなど、数々の輝かしい功績があります。しかし私には、先生の人柄や魅力にひかれて集まってきた多くの若者に、様々なかたちで影響を与え、育ててくれたことが、何よりも大きな功績だと思えてなりません。

京大時代の日高先生の研究室には、京大の学生ばかりでなく、動物の研究を目指す他大学の学生や学校の先生、一般市民など、ちよつと変わった人たちが、いつもにぎやかに出入りしていました。今から思うと、なかなか真似のできない大変なことだと思いますが、日高先生は、それらの人たちとも分け隔てなくつきあい、自分の学生と同じように研究の指導や協力をされていました。だから、直接の指導学生以外にも日高先生の指導で学位を取った研究者がたくさんいます。たとえば、和歌山県の山奥の小学校で先生をしながら

マネの研究をされていた湊秋作さんもその一人です。

また、日高先生はお酒が大好きだったので、よく飲み连接到行つてもらいました。お酒の席でのお話も大変面白く、今も心に残っているお話がいくつもあります。たとえば「科学は役に立つべきか？」という話。世間の人々は、動物の行動など、基礎的な科学研究に対しては、すぐに「それが何の役に立つのか？」と考えるのに、考古学や文学の研究に対しては決してそのように考えない。それは、多くの方が、考古学や文学に関しては、物質的に役に立つものではなく、ものの見方を変えたり、心を豊かにすることで「役に立っている」ことを理解しているからだ。本来は基礎科学も同様であり、必ずしも「物質的に役に立つ」必要はない。だから、ものの見方を変えたり、心が豊かになるような面白い研究をすべきだ。という話でした。自分の興味に忠実に「役に立たない研究」ばかりしていることに、多少の後ろめたさを感じていた当時の私には、このお話は大きな救いとなりました。

OKYAN 2009 の報告

(兵庫県西播磨 長水山・大甲山の
山行記録)

潮崎安弘

専ら兵庫県西部、播磨の山に毎年登っている通称 OKYAN の会は、今年も去る十月

考えてみると、研究の話も、個人的な相談も、重要な話はないとお酒の席でさせていただいたような気がします。

一昨年、私が一八年ぶりに京都大学に戻ってきた時には大変喜んでくださり、何度か一緒に食事させていただきました。すでに体調を崩されていたにもかかわらず、大好きなハイボールを飲みながら、以前と変わらぬ調子で楽しくお話しされていたので、安心していたのでありますが、それも昨年九月にお昼ご飯をご一緒したのが最後になってしまいました。今となつては、もつとゆつくり、いろいろお話しさせていただければ良かったと、悔やまれるばかりです。しかし、目を閉じると、お酒を飲みながら大好きなタバコをくゆらし「面白いな、なんでだろーねー？」と楽しそうに話しておられる日高先生の姿が、今も目に浮かびます。あちらの世界でも、きっと同じように楽しく過ごされていることでしょう。先生、これまで本当にありがとうございます。ご冥福をお祈りいたします。

二四〇二五日、揖保川上流の長水山（チョウスイザン 五八五米）と大甲山（ダイコウザン 一〇三五米）に登り無事終了した。参加者は昨年同様二五名、今年初参加の永田龍氏（七六年入部、通称ナマコ）と川嶋オレッツチ夫人、又関東からおなじみの松浦コッテ氏及び清水ムスコ氏が駆けつけてくれた。

第一日目の二四日はJR姫路駅に集合のあと、専用バスで長水山の登山口へ。自車参加の酒井オシメ、岩坪ゴロウ、井関の各氏も途中で合流して登山開始。

ここで長水山について一言。西播磨の中心の町、山崎町市街地近くにあるこの小高い山は、十三世紀以降の城址。地元の守護職赤松氏が山頂に城を構築、以後その一族が城主として君臨したが、戦国の世にあつて時には戦いに敗れ落城、再建するも最後は羽柴秀吉に攻略され廢城、二五〇年間の歴史を閉じたもの。昭和の初めになつて一族の末裔が山頂のお寺を建立、名を信徳寺と言う。お寺への参道は緩やかな山道があつて、途中まで車も入れるが、去る八月の豪雨で不通になつたので、我々は別の伊水小学校前の登山口から入山。最初は石がごろごろ転がる歩きにくい谷道を登ること約一時間で尾根に辿りつき、参道に合流。更に三十分の登りで山頂着。折からの秋晴れで麓の眺望すこぶる良ろしく、昼食のあと下山。再び出迎えるバスで例年の宿、東山温泉フオレストステーションに向かった。

翌二五日は雨模様の予報が外れてまずまずの晴れ。朝帰りの岩坪ゴロウ氏を除いて大甲山を目指して専用バスとサポートの自車で出発。車は宿から一旦鳥取へ抜ける国道二九号線に出て北上、暫く走った野尻地点から西へ分岐、村外れから林道に入る。

登山口からは深い森林内の急な道を三々五々夫々のペースで歩くが、やがて尾根道の上り下りから緩やかな広い林間を暫く歩くと

山頂となった。ゆつくり組の最後尾は大甲山々頂まで2時間強で到着。先着した早足組は更に奥の荒尾山(二一〇八米)まで往復、既に昼食中のゆつくり組と合流。

下山は登りと同一ルート。山頂から暫くはブナやカシ、シイ林の落葉を踏んで下るのは楽しく、更に下った広い尾根のモミジを交えた疎林は庭園に遊ぶ思いがした。しかしそれ以降続く細い尾根は結構長く互いにおぼつかない足を労りつつ慎重な下りを要した。ゆつくり組に遅れて出発した早足組は、登山口近くで先発組に追いつき全員揃っての下山となった。登山口からは暫く林道入り口まで歩き下り、出迎えのバスに乗車、宿舎へ帰着した。



大甲山山頂にて 全員の写真

帰着後は宿の東山温泉に入浴、姿を整え暫しの間の歓談も慌しく再びバスで姫路へ帰り、定刻とおり十八時の解散。関東組は直ちにJR新幹線で帰宅の途に着いた。

終わりに第一日目の夜、これも恒例となった懇親会後半の講演会を紹介しよう。今回は原田A氏によるカナダ鱒釣りのお話と、岩坪ゴロウ氏のアイルランド紀行。

原田A氏のお話では、本年六月末から十五日間カナダ中部のウイニペグに米国シカゴ經由の空路で入ったあと、更にターボフロップのチャーター特別便で北緯六十度線まで三時間の飛行で着いたのがカナダ中北部のカスバ湖。ここに一週間滞在し、ボートに乗ってのルアー釣り。成果最大の人は一週間で何と五二匹、全長一米弱十九ポンドの大鱒が釣れたという。

岩坪ゴロウ氏は、アイルランドの首都ダブリンからレンタカーで同国西端のアラン島まで往復。次いで連合王国北アイルランドに入

山案内人の竹沢長衛とAACK

斎藤清明

「南アルプスの開拓者 竹沢長衛を語る会」が昨二〇〇九年一月二八日、長野県伊那市で開催され、地元からAACKにも参加の要請があつて斎藤が出席した。この件について、

り、ベルファストから北端まで十月一日京都出発、十六日間の旅のお話。本人はガイドの費用が少し高くついたが、地元のアイルランド人から、直接イングランド人に対する恨み呪いを聞くことが出来たと言う。イングランドのクロムウエル鉄騎兵による大虐殺や、十九世紀ジャガ芋のべト病流行による大飢饉で餓死百万人、国外へ移住百五十万人という辛酸をなめた先祖を持つアイルランド人、その歴史も含めての含蓄あるお話であつた。

今年の参加者は、斎藤Y、中島ダンナ、井上トッキュー、寺本ショーチャン、平井ポコ、青野オンピキ夫妻、酒井オシメ、松井サルタン、新井夫妻、川崎夫妻、*高村デルファー、岩坪ゴロウ、川嶋オレッツチ夫妻、*潮崎パイマン、高野ゴジラ、松浦コッテ、上尾、*井関、原田A、清水ムスコ、永田ナマコの各氏。なお幹事は*印を付す三氏が担当、又川崎氏にはアドバイザーとして多大なご協力を戴いた。

編集部から依頼がありましたので、そのいきさつなどを記します。

竹沢長衛(一八八九〜一九五八)は、明治二二年に黒河内村戸台(現・伊那市長谷)に生れた。この戸台は、南アルプスの駒ヶ岳や仙丈ヶ岳の麓にある最奥の集落。長衛は戸台分校を卒業後は農業や山仕事に勤しみ、夜は分校の先生から論語や歴史、珠算などを習つ

たという。

ちやうど、明治の中ごろあたりから、わが国でも登山の風潮が盛んになってきている。一九〇五(明治三八)年には日本山岳会(當時は山岳会と称した)が創立されている。南アルプスの周辺にも登山者が訪れ始めて、一〇代の長衛も山案内を手伝うことになる。そして、明治四五年に兵役を終えた長衛は狩猟と山案内を業とするようにまでなった。もともと、当時は夏山の尾根歩きが中心だったので、その時期以外は猟をもつぱらとしていたそう。

そうして長衛は、明治から大正、昭和にかけて、登山道の開拓や山小屋の建設などを手がけて、それまでは信仰の山であった駒ヶ岳や仙丈ヶ岳を一般の登山者にも親しめるようにしたとして、「南アルプスの開拓者」といわれる。

主な仕事としては、昭和五年に野呂川上流北沢ほとりに「長衛(北沢)小屋」を、戦後の二六年には「藪沢小屋」を建てたこと。また、「藪沢新道」や「栗沢山新道」「仙丈巻道新道」「双児ルート」などを開いた。いまも白峰山塊には、「長衛谷」や「長衛沢」など、彼の名を冠した地名にその足跡をしのぶことができる。また、たびたびの遭難救助にも貢献している。

「おれが死んだら、仙丈の方を向けて埋める。いつもここから山を見守っている」と遺言して昭和三三年に亡くなった。人望があったのだから、その半年後には記念碑が除幕された。以後、毎夏(七月初め)に「長衛祭」

が催され、すでに五〇回を数えるまで続いている。

さて、長衛とAACKの関わりについて。なんとといっても、一九二五(大正一四)年三月、北岳を積雪期に初登頂した三高山岳部パーティの案内人をつとめたことだろう。京都帝大への進学を前にした春休みに、西堀栄三郎、四手井綱彦、桑原武夫、多田政忠がスキーを用いて登ったのだが、このときに長衛は小屋のキーパーとして、カモシカを八頭も仕留めるなど猟師の腕を奮っている。西堀によると、肉をたらふく食い、血まですすって元氣いっぱいに登れたそう。

じつは、この初登頂は三高のスキーと、地元の輪かんじきパーティとの競争でもあった。甲斐山岳会の平賀文男らは南側からの急斜面を輪かんじきで六日後に登頂するのだが、西堀たちはスキーで傾斜の少ない北側の間ノ岳からのルートをとったのだ。もちろん、長衛にとってもスキー登山は初めてのこと。その後すぐ、長衛はスキーを用いるようになったという。また、アイゼンも地元の鍛冶屋にそっくりに作らせている。

そもそも長衛と三高山岳部との付き合いは、今西錦司たちが三高入学した一九二二(大正一〇)年に始まる。その年の七月、京都一中の青葉会からの仲間である今西、西堀、河村尚夫が初めて南アルプスに入った。小島鳥水の登山紀を参考にしたことだった。テントも新調して、西山温泉から入山。白根三山と仙丈ヶ岳に登って、赤河原から戸台に下山した。日暮が迫って泊ったのが長衛宅だった

のである。

その後、三高・京大グループと長衛との関係が続いていくのだが、なかでも今西や高橋健治らの一九二七年秋の鋸岳への集中登山は、長衛宅をベースにしたものであった。鋸岳の各ピークの名称の確定と信州側の登路の開拓は、まさに地元熟知した長衛のガイドがあつてこそその快挙であつた。

このようにして、今西は長衛を評価していったようだ。北アルプスへも伴っている。一九二九年四月、鹿島槍尾根を四手井と長衛と組んで目指しているが、このときは悪天で撤退している。そうして、「カラフト落ち」となるのである。

AACKはヒマラヤを目指して一九三一年に結成され、カブル計画を立てるのだが、戦雲のために頓挫してしまった。やむなく、主力メンバーの今西、西堀、高橋、そしてスポンサー田中喜左衛門が、長衛を伴って、一九三二年夏に南カラフトに渡ったのである。地図が入手できない、外地という未知の山地を、ソ連との国境近くまでたどった。たいた山登りはできなかつたが、今西は探検の雰囲気を経験したという。

長衛とAACKとの表立った関係は、このあたりで終わっているのだが、今回の「語る会」の開催にあたって、地元の伊那市の関係者がその縁をたどって、わざわざ京都まで来訪された。私は「語る会」では以上の関係を紹介したのだが、その期待に応えられたかどうか。「語る会」のあとの懇親会での席上、「北岳バットレスの開拓も京大ですね、高橋健治さ

んたちが」と、地元の山岳関係者から声をかけられた。知る人ぞ知るだが、よく知っていてくれる人はいるものだと、うれしくなった。翌日、戸台を訪ねた。いまは、分校は廃校になって久しいだけでなく、ほとんど家は無人のようだ。長衛の家も尾根筋の藪に覆われてしまっているようだ。しかし、河原に降りて、上流をながめると鋸岳の鋭鋒がくつきりと望まれた。この景色には変わりはないはず。あの赤河原の方向から、三高山岳部の連中が今にも下ってきそうな気がした。

ポーランドの旅ご案内

一、今年でノシヤック初登頂から五〇年になります。一九六〇年夏、AACK隊につき第二登に成功したポーランド隊の隊員と連絡をとることを昨夏から試みていましたが、一月になってやっとポ隊登攀隊長ビエル氏と交信できるようになりました。

二、旅行団のあらまし

期日・二〇一〇年八月二三日(月) 関西空港

を出発(機中一泊をふくみ九泊一〇日)

九月一日(水) 帰国

訪問先・首都ワルシャワ、古都クラクフ、南部の国境に近いタトラ山地のふもとなど

ポーランド山岳会会員、ノシヤック登頂者のビエル氏ほか一、二名に会う予定

先方は晚餐一席をともにすることなどを考

えているようです

費用・概算三〇万〜三五万円

金額はまだ決定していません

三、背景説明

ポーランドは平原の国であり、南のチェコおよびスロバキアとの国境近くにだけ山岳地域がある。したがって登山者も山岳会もスロバキア国境に近いタトラ山地に近い所にいる(ある)。伝統文化をより色濃く残す古都クラクフ、避暑都市ザコパネとタトラ山麓など主にポーランド南部を訪ねます。

タトラ山地は最高峰が二六五五m、氷河はない。しかし積雪期はアルプスと同等の厳しさであり、そのためにポーランドからはヒマラヤやカラコルムで勇名をさせた登山者が輩出している。ただしわが旅行団は高年齢者が多く、山は登らない旨伝えてあります。

世話人は一九六〇年八月一七日にノシヤックに登った岩坪五郎と酒井敏明です。

昨年末から会員有志にメールで勧誘し、現在一五、六人が参加予定です。

若干名は追加することができますので左記あてご連絡ください。

世話人 酒井敏明 ts.sakai@juno.ocn.ne.jp

岩坪五郎 goro@ceres.ocn.ne.jp

映画「カラコルム」、「花嫁の峰チヨゴリザ」DVDブック刊行のお知らせ

このたび「DVDブック カラコルム／花嫁の峰チヨゴリザ」フィールド科学のパイオニアたち(梅棹忠夫監修、京大学術出版会)が、刊行されます。左記のようにDVD二枚に、各隊の歴史的意義、成立経過、行動記録とその後のフィールド科学の展開の記述、および関連資料を収録した書籍がついています。

【内容】

・DVD二枚組

「カラコルム」(一九五六年製作)、「花嫁の峰 チヨゴリザ」(一九五九年製作) いずれも約七九分、カラー

・書籍 A5判二五〇ページ(かつこ内はAACK会員執筆者、執筆順)

I 京大学カラコルム・ヒンズークシ學術探検隊 飯田卓(民博)(木原、今西遺稿など)

II 京大学学士山岳会チヨゴリザ遠征隊(高村、平井、酒井)、潮田(インタビュ)

III 京大学フィールド科学の展開 阪本(横山、松沢、田中、山本、竹田、幸島、松林)

IV 記録映画と社会 飯田付 関連資料一覽

価格は三九九〇円ですが、申し込みの際にAACK会員と明記すれば二割引きで三一九二円(税込)です。送料は一配送につき一冊一三〇〇円、二冊一四〇〇円、三

冊以上無料です。出版会が発送の代行も引き受けます。(代行手数料は一件あたり五〇円(パッケージ代)です。)

申し込みは、氏名、所属(AACK会員と明記のこと)、住所、電話番号、支払い方法(郵便)

便振替、銀行振込、カード)、冊数などをご記入の上、左記までファックスまたは電話でご注文ください。

京大学術出版会 京都市左京区吉田河原町一五一九、京大会館内

Tel. 075-761-6182 Fax. 075-761-6190

研究フォーラム

ヒマラヤ研究と川喜田二郎

現地調査に基づくヒマラヤ研究は、その開始からほぼ六〇年が経とうとしています。草創期の人類学的研究が提起した議論は、その後どのように展開し、現地社会はどのように変化してきたのでしょうか。今回の研究フォーラムでは、とくに川喜田二郎の先駆的研究を踏まえて、マガール村落研究および山村の文化生態の展開と現状について報告するとともに、ヒマラヤ研究の今後の発展に資する議論を模索します。

開催日時 二〇一〇年三月二十七日(土)

一四:〇〇~一六:三〇

開催場所 国立民族学博物館 二階

第五セミナー室(定員一〇〇名)

〒565-8511 大阪府吹田市千里

万博公園 10-1

参加方法

参加無料(観覧料不要)。

当日先着順。事前申し込みは必要

ありません。

お問い合わせ 国立民族学博物館 南研究室

makito@idc.minpaku.ac.jp.

Fax 06-6876-2160

Tel 06-6878-8298

主催 国立民族学博物館

共催 (社)日本ネパール協会関西支部、後援 (社)京都大学学士山岳会

プログラム

一四:〇〇~一四:〇五 開会の挨拶 須藤

健一(国立民族学博物館長)

一四:〇五~一四:四〇 報告「マガール村落研究の進展」南真木人(国立民族学博物館准教授)

一四:四〇~一五:一〇 報告「山村の文化生態―民族地理学の展開」池谷和信(国立民族学博物館教授)

一五:一〇~一五:二五 休憩

一五:二五~一六:三〇 パネルディスカッション「ヒマラヤ研究と川喜田二郎」

コメント 石井 溥(東京外国語大学名誉教授)

コメント 小林 茂(大阪大学教授)

石井 溥/小林 茂/斎藤清明(元総合地球環境学研究所教授)/池谷和信/南真木人
司会 高山龍三(元京都文教大学教授)

交通のご案内

○大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約一五分。

○自動車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(乗用車二二〇〇円)から徒歩約五分。

○タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

・万博記念公園駅で下車された方は、自然文化園を通行するため、入園料(大人二五〇円)が必要となります。

・公園東口駅からは、自然文化園に入園することなく来館できます。

・日本庭園前駐車場をご利用しないしタクシーで下車された方は、自然文化園に入らず、「日本庭園前ゲート」右側(北)にある国立民族学博物館専用通行口(無料)をお通りにください。

(詳しくは、<http://www.minpaku.ac.jp/>の交通案内をご覧ください。)

図書紹介

シエルパから見たヒマラヤ登山

Maurice Herzog 著 [Annapurna], E. P.

Dutton & Co., Inc., New York, 1953,

Nea Min and Janet Adam Smith 訳

Jamling Tenzing Norgay (2001):

[Touching My Father's Soul].

Random House, UK

安仁屋政武

二〇〇九年七月から八月にかけてネパールのアンナプルナー一周のトレッキングをした帰り、カトマンズの本屋で何冊かの本を購入した。その内の二つが、モリス・エルゾークの有名な「アンナプルナー」(英訳)とエヴェレストを初登頂したテンジンの息子、ジムリン・テンジン・ノルゲイ (Jinling Tenzing Norgay) が書いた「Touching my father's Soul」(父の魂に触れて)である。彼はダーズリン生まれ育ちのインド人であるが、民族的にはシエルパである。アメリカの大学で学んだので、ヒマラヤ登山を通じてシエルパ族のチベット仏教に基づいた考えと行動を解釈・説明し、西洋のそれと対比している。

エルゾークの日本語訳「処女峰アンナプルナー」はAACKの会員であれば皆読んでいると思う。しかし、古い昔のことで細かい内容については何一つ覚えていない。本が一九五二年に出版された第一版であるこ

と、舞台となった場所付近に行ってきたばかりであったので、一九五〇年代はどのような場所だったか比べたかったことなどから、購入した。Introductionは一九五一年にエヴェレストのクンプ氷河の登攀路を発見したシプトンが書いている。偵察隊を出さずにいきなり行って成功したのは運も当然大きいですが、やはり隊員一人一人の力が優れていたからであろう。今の本と違って写真は少ないが、私が衝撃を受けたのは二枚目の写真であった。それは死んだネパールの少女が聖なる池に浮かべられているものである。あたかも眠っているかのような安らかな顔、このような写真を撮ったこと、そして印刷したことである(私には撮ることも印刷することも想像できない)。

読んでいて壮絶で痛みが伝わってきたのは、凍傷で歩けなくなり、モンsoonで毎日土砂降りの雨の中をシエルパやポーター達に背負われて下山する時の気持ちの描写である。麻酔なしで足指を切断する想像を絶する痛み、テントで一人になったとき、あまりのつらさに生きる気力もなくなりかけたが、その時救ったのはやはり山仲間達の励ましであった、というくだりは涙なしには読めなかった。また後ろ向きに背負われていたので、急斜面では体がモンsoonで逆巻いて流れる川の上に出てとても怖かった、という記述が何回か出てくるが、私は数日前に通ったばかりだったので実感かわいた。土砂降りの雨の中の行進とキャンプは実につらかったであろう。私たちも当初はキャンプの予定だったが、

ロッジがガラガラだったのでロッジに泊まって快適に過ごした。あの雨の中のキャンプは厳しい。一九五〇年の装備であったらことさらである。そして彼の律儀さに打たれたのは、治療のために一刻も早くフランスに帰国したかった筈なのに、出発前のネパール国王との約束を守るため一週間かけてカトマンズへ行き、謁見したことである。また、彼を運び出すために献身的な働きをしたシエルパ、ポーター達にも改めて感動を覚えた。昨今の登山の風潮をみるとすがすがしい。

一九九八年頃?に日本でも公開された七〇mmのIMAX Film [Everest]を見た人も多いと思う。私は日本で公開される前に、アメリカからDVDを偶然手に入れて見たが、その時まで撮影隊が一九九六年の悲劇のまっただ中にいたとは知らなかった。この隊の隊長代理エド・ヴィースター (Ed Viestur) は八千メートル峰全てに登った最初のアメリカ人で、私は一九九四年キリマンジャロに行ったときに彼と同じルートに登っていたので会っている。この時すでにエヴェレストには三回登っていた。彼が二〇〇六年に書いた本「No Shortcuts to the Top」をパタゴニアの帰りに買って読んだが、このなかで特に印象に残った言葉がある。それは「Reaching the summit is optional. Getting down is mandatory」ということである。昨今、このことを忘れて遭難する人が増えているのではなからうか。一九九六年の悲劇も正にこれを守らなかつたから起きた。金で登山を買う必然の結果か?? 彼の八千メートル最

後の山が二〇〇五年のアンナプルナで、フランス隊のルートをとったが、雪崩が非常に怖かったと言っている。

二冊目に読んだ「父の魂に触れて」を書いたジムリン・テンジン・ノルゲイはこのMAXの登攀隊長としてその悲劇をつぶさに見ていた。映画にも頻繁に出てくる。彼は高校生の中から父を理解しようとしてエヴェレストへ登る希望を持っていたが、父の反対もあってこの時まで実現しなかった。悲劇の現場に居合わせた経験を交えながらエヴェレスト登山について、父テンジンの初登頂のエピソードを軸に、フィジカルな面からだけではなく、精神的・宗教的な観点をそこに交えて記述している。写真はざら紙に印刷した白黒が数枚で、特に魅力的なものではなかった。ので、どうしようかと本屋で手にしてしばらくページをめくっていたら、店員から奨められたので、買った。

本の出だしで驚くのは、彼が参加を決める前に、家族が敬う（一種の檀家）ラマ僧に一九九六年のエヴェレスト登山のことを占ってもらったら「凶」というお告げだったということである。これが敬虔なチベット仏教徒であるシェルパ族の宗教観の導入であり、行為の節目節目にラマ僧のお告げの話が出てきて、西洋の宗教観・価値観との違いを浮き出させている。そしてエヴェレストの女神ミヨランサンマ (Miyolangsangma) の話がいたるところに出てくるのが印象に残った。

偉大な父親のエヴェレスト登山のステップを文字通りたどった息子が行程の中でその

時々感じたこと、思ったこと、父親から聞いたことなどを交え、場面場面で父親がどう思ったか、感じたかを自身で解釈して父親を理解しようとした。エヴェレストに登った息子にしか書けなかった内容である。また、シェルパという立場にたつて（彼は隊員として参加したが心はシェルパと同じ）、ヒマラヤの高所登山にいかにも貢献してきたか、多くの犠牲を払ってきたかなどに触れながら、シェルパ（族）の宗教観や人生観をベースとして裏（外国人が書いた物を表とすると）から見た高所登山について彼なりの考えを詳しく書いており、興味深い。私たちが普段目にするヒマラヤ登山は隊員、すなわちシェルパを雇う立場の人達が書いた物である。シェルパの側から見たヒマラヤの高所登山についての本は他にないだろう。

MAXチームはサウス・コルには公募隊より一足早く着いていたのに、大量の公募隊が来ること（ヒラリー・ステップで渋滞が起きる）、天候の悪化が予想されることから、隊長の判断によって一旦ABCに降りて公募隊をやり過ごし遭難に巻き込まれなかった。遭難の際にはサウス・コルに残した酸素ボンベその他の装備を提供したりして最大限の救助活動に参加している。救助活動についてもシェルパの観点から述べている。ここで驚いたのは、サウス・コルでは盗難が頻発していることでテントに鍵をかけている、ということである。八〇〇〇メートルのところではテントに鍵をかけなければならないとは！遭難後のBCでの公募隊の隊員を観察していて、金で

登山を買う西洋人（今は日本人もか？）を暗に批判している。そこには仲間意識、連帯感、はかけられない。

目の前で一人も遭難死し、一旦BCに降りてから再びアタックする決心をするのは心理的にもものすごく大変だっただろう。再アタック隊に加わる決心をした時にもラマ僧のお告げが効いている。エヴェレストでは高所遭難した人を降ろせないで凍った死体が登山ルート上に放置されている、という。見ず知らずの人でもその横を通るのは良い気持ちはしないだろうが、今回は一週間前までは一緒に登っていて知っている（中にはよく知っている人もいる）人達である。お経を唱えながら通ったという。

我々は、マスコミでヒラリーがなにをした、これをしたというのは時々読んだが、テンジンのニュースはあまり聞かなかった。エヴェレストの初登頂者になったお陰でテンジンは今言うセレブになり、それにまつわる苦労話がたくさん出てくる。因みに、本には現場に居合わせた日本人女性二人が登場する。一人は登頂後に遭難したナンバヤスコさんで、クンブ氷河で会った時のことを数行書いている。もう一人はMAXのメンバーのツヅキスミヨさんであるが、激しく咳き込んで肋骨を骨折しアタックできなかつたそう。

日本ではかなり前からエヴェレストよりも中国名のチョモランマ (Chomolangma)、あるいはチョモロンマ、Chomolungma、またはChomolungma) が使われている。山に関して不勉強な私は、なぜネパール語のサガルマ-

タ (Sagarmatha、天の眉) を使わないのか不思議であった。計らずもその答えがこの本にあった。チョモランマは中国名ではなく昔からあるチベット／シェルパ名で、サガルマータは一九三〇年代に歴史家のバブラム・アチャリヤ (Baburam Acharya) によってつけられた名前だそう。納得である。

最後に父親と高所登山から学んだことは「謙虚さ」と言っている。ヒマラヤでシェルパと関わった経験のある人にはぜひ一読を勧める。

ジョン・モリス著、鈴木理恵子訳

「ジョン・モリスの戦中ニッポン滞在記」

小学館、一九九七

(原題 John Morris: Traveler from Tokyo)

平井一正

ここで紹介するジョン・モリスは英国の登山家、探検家であるが知っている人は少ないと思う。本書は一〇年以上前に発行され、新しい本ではないが、著者の紹介を主目的として本書を紹介する。

ジョン・モリス (一八九五～一九八二) は一九三八年一〇月、吉田茂駐英大使の推薦で外務省が招聘して来日し、四二年七月まで、東京文理科大学、慶応大学、東京帝国大学で英語と英文学を教えた英国人である。驚くことに外務省の招聘ということもあって、太平洋戦争開戦後も何ら拘束されることなく、行動は一九四二年に交換船で帰国するまで自由

であった。

本書は太平洋戦争開戦前後、戦争中の日本人の行動、庶民の生活、日本と日本文化などについての印象が書かれている。冷静な学者的観察ではなく、庶民や学生の側に立った見方であるため、ほんのりとした親しみをおぼえる。天皇制温存派でもある。第一部「日本でのくらし」、第二部「パールハーバーまで」の二部構成である。米軍の東京初空襲も経験し、戦争中の敵国人からみた貴重な体験が書かれている。「日本語を習得するのはエベレスト登頂と同じくらい困難だが、会話だけならそれほどでもない」と書かれているので、日本語もしゃべれたのではなからうか。

著者モリスは、ケンブリッジ大学で東洋学、人類学、考古学を学び、インド、中央アジア、ネパール、ブータンなど内陸アジアを遍歴した。第一次大戦を経験し、インド陸軍の軍人としてネパール、シッキム、チベットを旅した。一九二二年、三六年の英国エベレスト登山隊に隊員として、荷物輸送や通訳として活躍した。英国山岳会会員で、ヒマラヤンクラブの創始者のひとりであり、一九三一年にはヒマラヤンジャーナルの副編集長をつとめた。彼はインド陸軍の特権を活かして、当時禁断のネパールにも足跡を残し、特にフンザ周辺の地理などを明らかにしている。(文献一) グルカ、レプチャなどに関する著書もある。(文献二～五)

モリスは、三八年に来日後、北アルプスに

も訪れており、スキーや温泉も楽しんだという。一九三九年六月、吉沢一郎、望月達夫の推薦によって日本山岳会に入会しており、仙台的国際文化協会や横浜専門学校(現神奈川大)でエベレストの講演をしたことが記録にあり、日本山岳会の会員にはモリスの講義や話をきいた人も多い。(松田雄一: 百年の推移 日本山岳会百年史 本編 p167-169)

彼が交換船で帰国するときに、三〇〇冊の蔵書を東京文理科大の福原倫太郎教授に保管を託し、現在もこれらの蔵書は森巢文庫として東京教育大(東京理科大の後身、現筑波大)英文学教室で保管されているという。(筆者が確かめたが発見に至らなかった) 戦後英国で対日関係の仕事やBBCで勤務した。八六歳で死去。(文献六、七)

謝辞 私がこの小文を書ききっかけは、日本山岳会松田雄一会員からこのモリス氏のことをきき、同氏から上掲の本を頂いたことが始まりである。氏からはいろいろとご教示賜った。また会員葉師義美氏からは文献など多くの点でご教示賜った。両氏に感謝する。

文献

- 1 J. Morris: Some Valleys and Glaciers in Hunza, Geographical Journal, Vol.71, 1928, pp.513-537
- 2 J. Morris: Gurukhas Delhi, 1933
- 3 J. Morris: Living with Lepchas, London, 1938
- 4 J. Morris: Hired to kill, London, 1960

五 J. Morris: A winters in Nepal, London, 1963

六 Himalayan Journal vol.58, 1980/81, p.206
7 Alpine Journal 87, 1982, pp.268-269

日本山岳協会・山岳共済の案内

事務局 吹田啓一郎

日本山岳協会が実施する山岳遭難共済制度への二〇一〇年度の加入方法などの案内です。加入を希望される方は下記の要領で手続きを行ってください。

山岳共済の条件として加入者は山行前に所属山岳会(AACK)へ登山計画書を提出することが義務づけられていますのでご承知おきください。保険金請求時の手続きに必要となります。

日帰りハイキングなどの軽登山をされる方には、保険料の安い軽登山コースが用意されています。ハイキングといえども高齢の方にはどのような事故に遭遇するとも限りませんので、そのような方には万一に備えてこのコースがおすすめです。詳しくは後の説明をご覧ください。

海外登山をされる場合、国内山岳共済から死亡の際は死亡保険金が支払われます。海外山岳共済の加入の有無に拘わらず、海外登山やトレッキングの場合も必ず山行計画書を提出して下さい。また、海外山岳共済に加入すると海外登山での遭難捜索費用が支払わ

れ、国内・海外両方に加入されていると死亡の際は両方から死亡保険金が支払われます。

二〇〇九年一月から、制度の運用に必要な業務は横山宏太郎様、高尾文雄様にご協力をお願いしています。以前と担当者が交代していますので、連絡先などの変更にご注意ください。

なお、二〇一〇年度の保険内容・保険料・保険金額は前年と同じで、変更はありません。

一、山岳共済の種類

国内山行を対象に山岳登攀コースと軽登山コースの二つのコースが用意されています。

山岳登攀コースは八種類、軽登山コースは二種類のタイプが用意されており、それとは別に海外山岳共済の追加オプションがあります。

(一) 山岳登攀コースは表1の八種類です。
(二) 軽登山コースは表2の二種類です。初心者でも可能な一般登山道での普通の登山(夏山登山で雪渓を越えるために軽アイゼンを使用した場合も対応する)が対象です。軽登山コースの場合は山岳登攀コースと異なり、疾病が原因となる捜索費用は補償の対象となりません。

(三) 海外山岳共済

基本契約タイプの種類だけです。保険金額は次のとおりです。昨年と同様に、遭難捜索費用には緊急救助ヘリコプター費用も保証されることを確認しています。

死亡・後遺障害 百万円
救援者費用 五百万円

個人賠償責任 一億円

保険料は、対象の山岳、日数により個別に見積もられることになっていますので、海外登山又はトレッキングに行かれる方は、事前に横山様を通じ山行計画を提出して、保険料の見積もりを取得して下さい。尚、加入するためには、国内山岳共済(山岳保険)に加入していることが必要です。

参考までに、過去の保険料の事例を示します。

(A) 二〇〇九年の阪本公一さんのザンスカール(インド・ヒマラヤ)遠征三八日間のトレッキング…一人当たり保険料一四八〇円。
(B) 二〇〇九年の安仁屋政武さん達のチュルーウエスト(ネパール・ヒマラヤ)登山。(期間…三一日)…一人当たり保険料七二〇〇円。

(C) 二〇〇八年の阪本公一さん達のネパール・ヒマラヤ(ロールワリン)ラムドン・ピーク(五九二五m)登山(期間…四日間)…一人当たりの保険料九〇七〇円。

(D) 二〇〇七年の安仁屋政武さん達のコンロンの六〇〇〇m台末踏峰登山(期間…二九日間)…一人当たり保険料七二六〇円。

(四) 山岳登攀コース、軽登山コースのいずれのコースも山行中のみならず、日常生活でのケガも補償の対象になります

(五) 期間は毎年四月一日から翌年四月一日午後四時までです。中途加入も受け付けられます。

表1 山岳登攀コース

タイプ名	保険金額			
	1S	S	1B	B
死亡・後遺障害	100万円	100万円	159万円	159万円
遭難捜索	100万円	100万円	150万円	150万円
入院(1日)	1,000円	0	1,000円	0
*手術保険金(入院)	注*1		注*1	
通院(1日)	600円	0	600円	0
個人賠償責任	1億円	1億円	1億円	1億円
保険料	5,850円	3,560円	7,490円	5,200円
共済会年会費	1,000円	1,000円	1,000円	1,000円
合計金額	6,850円	4,560円	8,490円	6,200円

タイプ名	保険金額			
	1C	C	1E	E
死亡・後遺障害	235万円	235万円	500万円	500万円
遭難捜索	200万円	200万円	500万円	500万円
入院(1日)	1,500円	0	2,500円	0
手術保険金(入院)	注*1		注*1	
通院(1日)	900円	0	1,500円	0
個人賠償責任	1億円	1億円	1億円	1億円
保険料	10,440円	7,000円	21,680円	15,950円
共済会年会費	1,000円	1,000円	1,000円	1,000円
合計金額	11,440円	8,000円	22,680円	16,950円

*注1:手術の種類に応じ、入院保険金額の10倍、20倍、40倍の額が支払われます

表2 軽登山コース

タイプ名	保険金額	
	I	II
死亡・後遺障害	176万円	276万円
救援者費用	300万円	300万円
入院(1日)	2,000円	4,000円
手術保険金(入院)	注*1	注*1
通院(1日)	0	1,700円
個人賠償責任	1億円	1億円
保険料	2,000円	5,000円
共済会年会費	1,000円	1,000円
合計金額	3,000円	6,000円

*注1:手術の種類に応じ、入院保険金額の10倍、20倍、40倍の額が支払われます

二、加入の手続き
 加入を希望する方は、必要事項を明記した加入申込書を、A A C Kの指定する山岳共済担当者(横山宏太郎様)に提出し、指定の銀行口座に会費を振り込んでください。
 (一) 加入申込書には次の八項目を記入してください。(書式自由)。
 ①氏名(フリガナ)

- ②生年月日、満年齢
- ③郵便番号と住所(フリガナ)
- ④電話番号、FAX番号
- ⑤電子メールのアドレス(ある場合)
- ⑥職業名・職種名
- ⑦加入コース・タイプと海外山岳共済の追加希望
- ⑧同種の危険を補償するための他の保険契約

があるか
 ある場合は、被保険者氏名、保険種類、死亡・後遺障害保険金額、入院保険日額、通院保険日額を記載
 ⑨過去三ヶ年間にケガで保険金(五万円以上)を請求又は受領したことがあるか
 ある場合は、被保険者氏名、保険会社、回数、合計金額を記載
 担当者の連絡先は次の通りです。原則として電子メールでお送り下さい。
 電子メール: kotaro@affrc.go.jp
 FAX: 025-524-8216
 郵便: 〒943-0832
 上越市本町2-1-12-801 横山宏太郎
 (一) 保険料・会費の振込口座(申込みと同時に振り込んでください)
 銀行: 第四銀行稲田支店(ダイシギンコウイナダシテン) 店番号514
 口座番号: 普通預金1241931
 名義: A A C K山岳保険
 横山宏太郎(ヨコヤマコウタロウ)
 (二) 年間を通じての保険加入の募集締め切りは三月二〇日(山岳共済事務センター)着です。従いまして、毎年三月五日までに担当者(横山様)へ申し込みと会費振込みをしていただければ、四月一日から有効となるよう手続きをします。途中加入も可能で、この場合保険料は加入月数に比例して減額されます。詳しくは担当者にお尋ね下さい。なお、手続き完了の翌月に日本山岳協会から一般共済会員証が担当者に送付されてきますので、担当者から本人に転送します。

三、加入者の山行・登山計画書の提出

加入者は山行時に次のことを守って下さい。

(一) 山岳共済の適用を受けるには、日帰りハイキング以外のすべての山行(沢歩き、岩登り、積雪期の登山、及びすべての泊まりがけの山行)で登山計画書を提出する義務があります。

(二) 登山計画書には次の事項を記入して下さい。

登山目的、日程、ルート、メンバーの氏名・年齢・住所・電話番号、留守本部、最終下山日、共同及び個人装備、食料(実働・予備日明記)

(三) 登山計画書の提出先は高尾様です。できる限りワープロなどで作成したファイル電子メールに添付して hutte.rv@topaz.ocn.ne.jp へお送り下さい。できない場合は、下記の自宅へ郵送して下さい。入山日の一週間前には提出し、変更があればその都度ご連絡ください。

〒156-0052

東京都世田谷区経堂5-17-15-104

高尾文雄宛 (Tel/Fax: 03-3439-9262)

(四) 下山後、高尾様へ速やかに電話やメールで下山報告をしてください。

(五) 高尾様が担当するのは登山計画書のとりまとめで、留守本部ではありません。留守本部は必ず山行計画者が自己の責任で定めてください。万一の事故発生時の捜索救援体制も、山行計画者が事前に検討しておくべきことであることをご承知ください。

(六) 登山計画書を提出しない方は次年度の加入をお断りします。

(七) 山岳共済に関する疑問点や、更に詳しい説明が必要な場合は、担当の横山様にお問い合わせください。原則として電子メールでお願いします。

また、日本山岳協会のホームページにも説明があります。

<http://www.jma-sangaku.org/kyosai/index.html>

会員動向

会員異動

訂正 (51号)

一、はじめの文章、最後の節

〈誤〉雪氷学会で「雪氷学術賞」を…

〈正〉雪氷学会全国大会で「学術賞」を…

二、22ページ中段17行

〈誤〉大和山脈

〈正〉やまと山脈

三、22ページ下段9行から13行、3カ所

〈誤〉補足率

〈正〉捕捉率

四、22ページ下段、最後から4行目

〈誤〉編修委員長

〈正〉編集委員長

編集後記

平均年齢の高い会の情報誌はどこもそうであろうが、当会もこのところ計報つづきで編集子少々減入っております。どうか元氣の出る記事をお送りください。

次号発行予定は五月末日。

原稿締め切り 四月二〇日 (発行の遅れを取りもどすためご協力ください)。

編集委員 前田 司

発行日 二〇一〇年三月一五日

発行所 京都大学学士山岳会

千六五―八五四〇

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一―八

(株) 土倉事務所